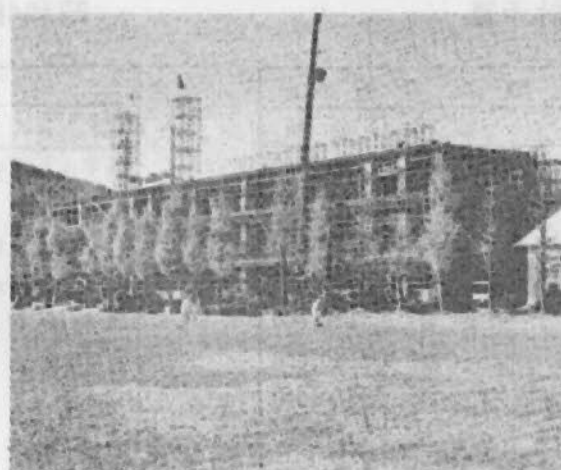




発行所 高崎高校同窓会
高崎市東町723
TEL 0273-24-0074

編集兼発行人 戸塚 興
印刷所 熊谷 秀夫
TEL 0273-22-2751

新校舎改築工事始まる



改築中の新校舎
(写真は49回卒岩山写真提供)

長い間、のび／＼になっておりました校舎の全面改築がいよいよ今年の八月より始まりしました。先号で略図等はご紹介しておきました。工事は三期に分かれておりまして、予定通り進みますと、三階建ての鉄筋校舎二棟が三か年で完成することになっております。

一期工事は南側の校舎の中、その四分の三で、現在の理科校舎の東側に教室が十八室建てられつつあります。思い出のある美術教室の姿は今はなく、そのあとに建築工事が井上工業の手によって進行しております。基礎工事では当地は水位が高く、水を

ポンプで吸い上げての難工事、さぞ大変だったろうと考えております。工事中の建物は正面玄関の前まで長さが伸びてきております。玄関両脇の二本の太木、糸ひばは残っておりますが、車廻しの中の五つほどの石は整理されており、セメント打ち工事用の生コンのトラックが出入りしているのが現状です。

さて二期工事は、一期工事の延長、すなわち南側の校舎の残り四分の一の教室九室と、現在の中庭に建築予定しております北側の校舎、いわゆる管理棟の東半分の予定です。管理棟では保健室・通信制課程の諸施設・宿直室(一階)、正面玄関・校長室事務室・会議室(二階)、地学教室・社会科教室・進路指導室(三階)等が主なところとして、やがては屋上に天文台のドームが陽に映える学び舎を夢に描いております。最後に三期工事ですが、管理棟の残り、西半分として、生物教室・視聴覚教室・教務室・図書室・L.L教室・美術教室等が予定されております。

現在の校舎は二期工事が始まりまして、南校舎は教務室等一部を除いて、その姿は消えてゆきますが、北校舎はそのまま全工

事完成まで残ることになっております。いろいろの思い出を残す現校舎もやがて消え時代の推移とともに面目を一新した新校舎が乗附の原(かなりの家が建ち並び、今ではこの言葉は通行しません)に山の緑と対照的にその姿を見せるのもそう遠いことで

創立八十周年記念事業について

来る昭和五十二年は、高崎中学校が赤坂町長松寺の仮校舎に産声をあげた明治三十年より数えて、丁度八十年になり、新校舎も完成する予定ですので、昨年七月十九日に、同窓会・PTAの合同役員会をひらきその後、度重なる会議を経て、今春の同窓会ならびにPTAの総会において承認され別紙趣意書にある記念事業を行うこととなりました。よろしくご賛同の上ご協力下さいますようお願いいたします。以下事業内容につきその概略を申し上げます。

役員会で第一番に取り上げられた事業は校庭の改修でありました。本校の校庭は粘土質が非常に多く、雨の後は、三日ぐらい授業が出来ない状態で、雨季の授業に多大の支障をきたして居ります。ご承知の如く現在の高校教育において、体育の授業は、昔より一段と重要さを増しており、また放課後の部活動も、スポーツとしてばかりでなく、人間交流の場として、その価値が高く評価されておりますので、校庭の改修は

はなくなりました。本校八十周年記念事業とからめて、その完成が待ち望まれるわけですが、今後とも一層の同窓会諸兄のご指導、ご支援をお願い致す次第です。(塩浦)

生徒の教育上非常に有難いことであります。事業内容は、排水管を完備し、その上に浸透力のある土を盛り、さらに冬季の乾燥を考えて、給水施設を造るものであり、すでに高崎商業高校等で施行して成果をあげております。次に学芸部室は、現在は校舎内に点在しており、部活動の場として、また顧問教師と部員との人間的接触の場として重要な施設となっておりますが、新校舎には部室がありません。そこで、記念事業の一つとして、学芸部室棟の新築をお願いした次第です。

最後に、学校史の編纂ですが、すでに校内では編集委員会を作り、着々準備を進めており、写真を十分に取入れてユニークなものを作るため努力して居ります。完成までには、皆様方のご指導ご協力を仰がねばならぬこともあると思いますが、よろしく願います。(戸塚)

募金目標 一般寄附金千万円 計七千万円
特志寄附六千万円

同窓会総会のおしらせ

日時 昭和五十年一月二十五日(土)午後二時より
場所 問屋町 高崎商工会議所 六階ホール
会費 一、五〇〇円(当日いただきます。)
〇万障繰り合わせて是非ご出席下さい。

昭和49年度同窓会経常会計予算

(昭和49年1月～12月)

収入の部		支出の部	
摘要	金額	摘要	金額
前年度からの繰越金	242,785	会議費	30,000
		祝賀費	80,000
入会金(全日制405)	405,500	饗別費	100,000
		慶弔費	30,000
維持会費	614,610	通信・印刷費	150,000
現金・振替あわせて		旅費	40,000
20万円増収を見込む		總會通信・印刷等	350,000
利息	6,774	同窓会報	150,000
		事務費	70,000
		予備費	269,169
計	1,269,169	計	1,269,169

昭和49年2月2日 会計 校内幹事 塩浦徳三郎 角田 匡己

昭和48年度同窓会経常会計報告

(昭和48年1月～12月)

収入の部		支出の部	
摘要	金額	摘要	金額
前年度からの繰越金	258,276	会議費	3,570
		祝賀費	69,025
入会金(全日制360)	364,000	饗別費	116,000
転入生4		香典費	16,000
維持会費(現金)	173,000	通信・印刷費	91,810
維持会費(振替)	241,610	旅費	32,670
		總會通信・印刷等	313,560
利息	6,774	同窓会報	91,000
		事務費	67,240
		次年度への繰越金	242,785
計	1,043,660	計	1,043,660

特別会計 予備金として 363,697円(高崎信用金庫)

昭和49年2月2日 会計 校内幹事 塩浦徳三郎 角田 匡己

昭和49年度 庶務報告

49. 2. 2. 同窓会総会 高崎 商工会議所大ホール
 5. 20. 京浜同窓会 東京 都道府県会館
 新入生歓迎会
 6. 15. 創立80周年記念
 事業委員会発起 高崎 すいらん会館
 人会
 7. 8. 同上実行委員会 " "
 10. 8. 同上事業募金部 " "
 実行委員会
 11. 8. 京浜同窓会総会 東京 都道府県会館
 12. 10. 常任理事会 高崎 すいらん会館

昭和49年総会の結果つぎのことが決まりました。

(1) 会則変更について

第4条 理事若干名 幹事若干名→

理事若干名 会計監査若干名 幹事若干名とする

第4条 常任理事は理事より会長これを依頼する→常任理事は理事より
会計監査は会員より会長これを依頼する。

(2) 役員依頼および追加がつぎのように決まりました(敬称略)

顧問 井上房一郎(15) 高間 繁(19) 吉野庸三(20)

安居次夫(前校長) 中野敏宗(現校長)

常任理事 村田謙二(24) 須藤実作(24) 清水貞保(30) 塚越輝夫(36)

重田精一(38) 山本富夫(45)

会計監査 竹林文彦(47) 須永 孝(47) 石井敬之助(50)

四三会近況

四三会は昭和十九年春卒業。

現在、住所確認者一三五名、未確認者一

五名、物故者一九名。

県内在住者七六名、東京十八名、他地域七

五名。

職業は教師二一名、医師十七名、その他。

本年は卒業後三十年を迎え、物故者恩師

同期生の慰霊祭を行った。

五月十九日、母校裏山の県護国神社にお

いて。

当神社は、私達が在学中にしばし開拓

作業に従事、入魂式に参加した緑いの深い

杜でもあり、故人を慰霊し、往事を偲び、

旧交を温めるに最もふさわしいと考えたか

らです。

当日は物故者の御遺族、恩師安居次夫、

岩下美千穂両先生、現高々中野校長の御臨

席の下に、厳肅に執り行われました。

宴に入る冒頭に同期の詩人山口保君から

鎮魂歌「五月の風」の朗読があり、参会者

の共感を呼び、この会合の意味を有意義な

ものとする事が出来ました。

同君の詩文を掲げて、やがて初老に入ら

んとする四三会の近況と致します。

(代表幹事 小澤 清)

鎮魂歌

—五月の風—

山口 保

五月の風が吹く

追憶の樹に若葉をそよがせ

きざまれたかずかずの名をめざし

五月の風が吹く

生きて集う人々の胸に
世を去った人々の眼に
五月の風が吹く思い出したまえ あの頃のことを
吹き寄せる五月の風よ

榛名の嶺をうたった燃える頬を

鳥川に映した明るい瞳を

乗附の野を進んだたくましい足並を

それは 人々の額の葉むらを

嵐がうばっていった季節だった

それは いさぎよい若人たちのはばたきが

秋空を飛び去った季節だった

それは 身を切る北風に肩を組み

隊列を組んだ季節だった

それは 氷の剣と銃弾に貫かれた若人たちの

雄々しい血が勢しく流された季節だった

思い出したまえ 三十年の年月を

年ごとによみがえる五月の風よ

ほろびることのないあなたのまことが

まなびの庭に並び立つ銀杏の若木を

かがやくいのちにしたい

教えたものも教えられたものも

世を去ったものも生きて集うものも

ひとつに結ばれた大樹にした

五月の風が吹く

追憶の樹に若葉はあふれ

きざまれたかずかずの名は語らい

五月の風が吹く

かなしみのときを越え

ふるさとの野山を渡り

ああ 五月の風が吹く

私の高中時代

須永 考

私の高中時代は、昭和十八年四月より、昭和二十三年三月迄一戦争の末期から、戦後の混乱期迄でした。

坊主頭にゲートルを巻いての登下校すらが、何故か誇らしかったのですから、人間の意識などと言うものは、時代によって、随分と変わるものです。

一年生の頃は、農繁期毎に一週間位の農家への勤労働員以外は、学校で授業がありました。

二年生になると、三年以上が、かなりの期間工場へ勤労働員になり出されたので、その間だけは割り合いのんびりとした学校生活が送れました。

当時の上級生の恐ろしさは、一通りではなかったのですから。

三年生になって、工場へかりだされ、八月以降もしばらくは授業もありませんでした。

米軍が日本に進駐してくる前日、当時の内藤校長先生が、全生徒を講堂に集めて、「明日から言う私の言葉を信じるな、今日、これから話す私の言葉を胸にた、きこんで置け。」

といわれたのが、今も思い出されます。雑誌「世界」の論文や、新聞の社説を教材にする等、一つの時代が区切れる時の、先生方の苦労は大変なものだと思います。マージャン、パチンコを覚えたのもこの頃でした。映画や、群響にかよいつめたり部活動で、バスケットボールに熱中したり

選挙演説をき、にまわったり、古本屋で参考書をあさったり、ザラ紙の教科書を渡されてむさぼり読んだり……芋がゆと磯部の鮎泉の「みそ汁」でどうして、あんなに貧欲になれたか不思議の様です。

或はそれが「若さ」というものかもしれ

本校のあゆみ (概要)

草創のころ (そのII)

峰岸米造分校主任



峰岸米造先生

明治三十年四月、赤坂長松寺にここの声をあげたわが高崎高校の前身、群馬県尋常中学校群馬分校の初代主任は、いうまでもなく、峰岸米造であった。

峰岸は、その後、東京高等師範学校教授となり、彼のあらわした六十種におよぶ歴史教科書が大正から昭和はじめにかけて、全国の中等学校で大量に採用され、その方面のベスト・セラーとなって中等教育界に

ません。

満ちたりた管理社会が、人間を幸せにするものでない事だけは、確かのようにです。

(四十七回卒)

その名をとどろかせた。晩年は、戦災で東京池袋の豪邸を、ほう大な蔵書とともに一夜で焼失し、戦後まもなく、や、不遇のうちに郷里の赤城山麓でさびしく逝ったが、知る人ぞ知る人物であった。

前回のべたように、彼が本校に在任したのは明治三十年四月から翌三十一年四月までの一ケ年で、かぞえ二十八才で着任という若さであった。ついでにいえば、彼は群馬県尋常師範学校に入学する以前、十六才にして桐生西小学校校長にもなっている。いかに俊才とはいえ、学校制度揺らん期のなせるわざで、今日ではとうてい考えられぬ現象であった。

先年、同窓会で歴代校長の在任中の写真を集めようという議が決められ、以来集取につとめているが、意外に困難で今日まで全員集っていない。その中に峰岸主任もあつた。中央で名を成した人だから、とはいっても本校在任中の写真は今となると、どこにも当りようがないと考えられた。ところが偶然、家蔵の書中に「峰岸名譽

教授教育功労記念会記念誌」なる一本を発見した。これは彼が高師教授を退官し、従三位勲二等の身で名譽教授になったのをたたえる会の文字通りの記念誌で、昭和十三年発行のものである。この口絵に明治三十年当時の写真があつた。これまさに主任在任中の面影とするに足るものとして、懸案解決の形となった。

本誌にはまた彼の小伝も載っており、その中の「高崎中学校教諭時代」には、裏話めいたエピソードが記してある。必要部分をグク一部紹介してみる。

「先生が高崎中学校に赴かれた頃には、まだその敷地もなく勿論校舎はなかった。それで群馬郡役所の一隅で執務を開始した職員は、殆ど皆東京で選んで連れて行かれたが、無資格者が多かった。半年ばかり経った頃、恩師より手紙があつて、附属中学校に來任せよと求められた。先生は創立の仕事の一段落を終えるまで待ってもらふこととし、転任の事は絶対秘密に附して置かれた。翌年一月、滋賀県膳所中学校創立の仕事がまかされることになったが、先生は辞されてしまった。その頃新潟県新発田中学校からも呼ばれたことがあつた。(竹林)

会員の異動調査のお願い

本年も又、住所、職場の異動、その他御気付の点がありましたら同封のハガキでご連絡下さい。52年改訂版名簿原稿の基礎資料の整備中です。期別、地域別、OB会等御報せ下さい。旧名簿の残部御希望の方一部一〇〇〇円、送料二〇〇円(切手可)御申込下さい。 名簿係 増村 博

旧師のコラム

勤勞奉仕

中曾根 宇内

大東亜戦争もいよいよ酷となり、営農の柱とも頼む青壮年は殆んど赤紙で召集された。戦後を守る教職員生徒にも、食糧増産のため文部省から勤勞奉仕の動員が下った。生徒は組主任引率の下に、各町村の農業協同組合に出陣した。職場は大体高崎市を中心に、碓氷群馬佐波の各郡で、職種は草むしり、じゃが芋さつま芋掘り、稲刈であった。某村で初め二日程順調にやっていたが三日目に一大事件が起った。村の実行委員長が、陸苗圃の種引きをさせた。生徒は誤って本物の稲を数本抜いた。怒った彼は直ちに組合に報告した。組合長は私に向って一粒の米をも多く増産する時、稲を抜かれては迷惑だ、明日からお手伝を断るとの事でした。その日実行委員長会議が開かれ二十数人集った。そこで一応生徒の粗相を陳謝してから開き直って、皆さんは何十年もの営農のベテランだ、生徒は勉強が使命です。苗圃の稲と種の見分がつく筈がない、玄人でさえ困難な仕事だ、ましてその委員長は煙草をふかしながら指導もしなかった皆さん穩りの秋ともなると、一面に種がはびこっているがあれはどういう訳ですか、苗圃で苗取で田植で田の草取の段階で駆除出来ないものでしょうかと詰め寄れば、一同顔色なく、私も溜飲を下げて退去したが組会長は暴言を吐いて申訳がない、機嫌を直して引続きお世話になりたいと謝罪した

ので、茲に劇的な幕が下りた。

この事件で強い印象を受けた私は、農民となつてから、増産の敵、種を早急に駆除する方法を研究した。私は水苗圃なので、苗が二三匁延びた頃、夜千三回、日千三回やった。日光に当って倒れる苗が続出した抜いて見ると黒い種子がついている。之が問題の種であることを知って奮躍した。この私なりの一大発見は、数日後何処から聞いたか、上毛新聞社が新参農民の体験として報道した。

ふた昔前

大塚 雅彦

私が高崎高校の教員をやめて上京したのは昭和26年である。ところが妙なめぐり合せで、長いこと東京方面にワラジをはいっていた身が本年八月、突然前橋家裁に転勤になつて、久しぶりに帰郷することになった。私が在職の頃は上和田町の旧校舎から乗附の現校舎に移ったばかりで、未だ旧連隊内の仮校舎で一部授業をしていたと思う。旧制中学から新制高校への制度の変革期で混沌としていたが、創造的エネルギーに溢れていた。私は上級生に「時事問題」という科目を講じ、下級生には「社会科」や「英語」の授業をした。「時事問題」では当時できたばかりの新憲法制定経過の話など、授業中に小説を読んでもやったり、戦没学生の手記を読んでもやったりしたから、あまり真面目な教師だったとはいえない。それに、社会科教師のくせに文芸部長をして、部員の生徒諸君(岡村昇治君は当時の部員の一人である)と共に「翠巒」を編集発行したり、諸君に短歌を作らせて、上毛

新聞や高崎市民新聞に載せたりした。

生徒諸君も今の生徒よりはずつとおとなだった。家永教科書裁判の主任弁護人である新井章吾弁護士、立正大学教授(憲法)の永井憲一君、評論家で学生問題に造詣深い中島誠君、児童文学の権威神宮輝夫君等は皆当時の生徒である。校舎が火事になったこと、乗附の河原を空つ風に吹かれて長い八千代橋を渡って歩いた通勤、昼休に学校の背後の観音山の丘に上つて寝そべって仰いだ白い雪と、思い出は尽きない。

母校だより

野球部、見事健闘

前回は大学進学状況についておしらせしましたので、今回は本年の運動部の活躍ぶりを紹介致します。

進学状況もさることながら、受験勉強に追われての部活動はいろいろきびしい条件の制約を受けてはいるものの、その成績は各部ともに輝かしい実績を挙げ、伝統・高々健児の意気盛んな所を天下に示しております。

全県制覇を連続させているラグビー部は今年も全国大会出場権は得られなかったがサッカー部の佐賀県でのインターハイ出場同じくテニス部中坪・石田組の三回戦進出陸上部、倉林君の五種競技における全国16位入賞などのほか、水泳部野村君の国体出場、バレー部の国体県予選での準優勝、バスケ部、剣道部などの健闘には目を見はるものがありました。これらの中で特筆したいのは本多監督率いる野球部のめざましい活躍ぶりでした。昨春、県優勝校として甲府での関東大会で、第二回戦に進出、江

川投手を擁する作新学院と対決、健闘、夏の大会に期待されましたが、思わぬ苦杯をなめて以来、本年のナインは捲土重来を期し、夏の大会では「個を生かした高崎野球」と「ダイナマイト打線」の名をほしいままに、安定した投手力と息つく暇のないほどの長打を続々、炸裂させ、向う所敵なしの中で、ほとんど一方的試合ぶりで大泉高、高工、伊勢崎商、桐生高を撃破し、県代表校として北関東大会では宇都宮学園高を劇的な逆転によってねじりふせ、愈々、甲子園への最後の関門で前橋工と覇を争いましたが、戦運我に利有らず、もう一歩のところまで、その栄冠を逃したことは、いくら悔いても余りあるところでした。

秋季関東大会県予選、僅か部員十一名での新陣容のスタートでも、予想にたがわず伝統の打棒をあますところなく発揮させ、非力の投手力を見事カバーして、農大二高太田高、桐生高、関東学園などを烈しい打撃戦の末、撃破し、決勝戦では中央高を五―一と降し、十八年ぶり、三度目の優勝を飾りました。

関東大会は十一月三日、茨城県日立市で開催されましたが、一回戦、夏の甲子園で話題をさらった村中投手の神奈川県代表の東海大相模と対戦、五―〇の劣勢をリリーフ落合の好投と中盤から持ち前の打線の活躍で、ジリジリと追い上げ、七回四連安打などで、同点に追いつきましたが、最終回僅かな守備の乱れから、善戦むなしく敗れました。計十六安打と東海大相模を上回る大量安打を放ちながら、最後の最後で力尽きたというところでした。今後とも、会員皆様の絶大なる御支援と御協力をお願い致します。

(岡村)